様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３０６９

研究課題名（和文）ガージャール朝末期イランにおける地方政権の興亡

研究課題名（英文）Rise and Fall of the Local Governments in Iran at the end of the Qajar Era

研究代表者
黒田　卓（Kuroda, Takashi）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：７０１９５５９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：イラン近現代史は大きく言って、ナショナリズム、イスラーム、社会主義の３つの思想潮流の対抗と交錯によって彩られてきた。本研究はそのうち社会主義の流れに着目し、ガージャール朝末期の「ギーラーン共和国」の興亡を主に考察対象とした。この「共和国」におけるナショナリストと急進的な社会主義実践を唱えるグループとの対立を、研究発表で解明し、ナショナリズムの原点ともいえる西欧との遭遇経験を編著に掲載、また最終年度には、「第一次世界大戦と地方政権の興亡」を題する１章を、イラン史概説に寄稿し近々刊行される予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ナショナリズムの原点としてイラン人知識人が西欧の近代性といかに向き合ったかを種々のペルシア語旅行記分析を通し解明し、編著の一章として著した。これは何度か、雑誌、書評紙や一般新聞で批評や紹介がなされた。また、「ギーラーン共和国」興亡については、全国から集まった研究者の前で研究発表を行い、実りの多い議論ができたが、他方こうした知見を基礎に、学生や社会人などの一般読者向けに、第一次世界大戦期のイランの歴史状況とその中から地方政権が誕生するメカニズムを描出した。

研究成果の概要（英文）：Modern history of Iran, roughly speaking, could be shaped by confrontation and interaction of nationalism, Islam and socialism. This research project focused on the aspects of socialim in Iran and took up the so-called 'Gilan Republic' at the end of the Qajar Era as a research target.
I elucidated the historical process of the conflicts between the nationalist group and the radical communisits composed of Iranian emigres in one of the research presentations. While one chapter on the enconter with Europe by Iranian intellectuals as an instance of the origin of nationalism was published in an edited book, the article entitled, 'WWI and the Local Governments' will appear soon in the book on general history of Iran.

研究分野：イラン近現代史

キーワード：アジア・アフリカ史　西アジア・イスラーム史　イラン近現代史　社会主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

日本の４倍の面積を有する中東の大国イラン。1979 年のイスラーム革命以来、革命政権樹立 40 周年を経て、いまなおその特異なイスラーム政治体制は健在である。革命の成就以来、反欧米、反イスラエルの強硬姿勢を貫き、国際政治の舞台では、周辺諸国（とくにアラブ湾岸諸国）への革命イデオロギー輸出に対する警戒感と相まって、国際的孤立を深め、そのことがまた自国の原子力エネルギーへの利用なる理由で核技術開発へと歩を進める結果になった。経済制裁による国内経済の不振に端を発して、欧米諸国にロシア、中国を加えて核問題の凍結を約束したものの、依然核兵器開発への不信感は容易に払拭できないでいる（事実その後米国トランプ政権の登場により、この合意体制からの一方的離脱が宣言され、それに反発するイランのパフォーマンスが国際的にも種々の反響を呼んでいるのは記憶に新しい）。

しかし一方で、８千万人余の人口を擁し、世界有数の石油・天然ガスなど豊かなエネルギー資源の産出と埋蔵量を誇り、加えて中東地域では稀な女性を含めた人材能力の高さや、国内市場の相対的な成熟度においても、この国が安定した政治・外交状態さえ築ければ、たいへん将来有望な潜在能力をもっていることを示している。ただその際、現在を読み解き、未来を占うに当たって、一見理解しがたいこの国の振る舞いを冷静に観察するためには、何よりも 18 世紀末に成立するガージャール朝からパフラヴィー朝にかけての歴史の変転へと遡行し、現代へと連なる歴史の連鎖を丹念に辿ってゆく必要があるだろう。

以上のような課題意識に支えられ、研究代表者は長年にわたり 19 世紀初めから 20 世紀前半までのイランをめぐる国内外の政治・社会史、とりわけ民衆が主体になる社会運動の個別的な特性と、それらの系譜の解明に努力を傾けてきた。なかでも、注目に値する社会運動の一つとして、イラン・ナショナリズム、イスラーム（パン・イスラミズムからジハード主義までを含め）、そして多層的な構造と担い手を内包する社会主義が複雑に錯綜しながら展開したジャンギャリー運動（運動の名称は森林（ペルシア語で「ジャンギャル」）を根拠地としたことに由来）が挙げられる。

この運動は、第一次世界大戦中のイランの事実上の戦場化に伴う国内混乱の渦中から台頭し、カスピ海南西岸に位置するギーラーン州を本拠に周辺地域をも巻き込みつつ自己の勢力を扶植し、実質的な地方権力を現出せしめていた。歴代政権の懐柔交渉や軍事鎮圧作戦の前に、いったん後退を余儀なくされたが、ロシア十月革命勃発によるロシア軍の撤退と、その空隙を埋めるかの如く内戦を収め南コーカサス（ザカフカース）方面まで進撃を続けていたソヴィエト赤軍とその庇護下にあったイラン共産党勢力と、1920 年５月に共同協定を結び、翌月には州都ラシュトにおいて「イラン社会主義ソヴィエト共和国」の樹立を宣言し、ガージャール朝王制を否定する政体の創設を内外に宣明した。しかし主としてナショナリズムとイスラームの混淆した価値観を基調としていたジャンギャリー勢力と、人的には主に外来勢力よりなるコムニストたちとの蜜月は、わずか２か月で瓦解し、20 年８月から翌 21 年春まで、共和国政権はコムニストたちとその同調者によって運営される。この政権が強行した「純粋共産主義的」実験への反発により、21 年初めより再度の統一戦線復活が模索され、春にはそれが実現し軌道に乗り始めたようにみえた。ところが、この共和国の最終局面は、イランの国家権力そのものより、むしろ大戦後も軍を駐留させていたイギリスと、それと暗黙の妥協の道を選択した、ソヴィエト東方外交の転回によって幕引きが合作されたと考えられる。

大筋は以上のように素描できるとはいえ、大戦のもたらした甚大な被害と荒廃、ガージャール権力の統治能力の急落、レザー・ハーンコサック師団大佐によるクーデタのような、国内政治の目まぐるしい転変、そしてそれらとイギリスとロシア、及びソヴィエト政権が関与する国際関係のダイナミクスがいかに絡み合い、相互に連動し合ってゆくかは、まだまだ（イランやロシアでようやく公開されつつある文書史料の利用も含め）実証的に検証を重ねていく余地があると言える。

２．研究の目的

イラン近現代史は、上述のように、大きく言ってナショナリズム、イスラーム、そして社会主義の３つの主要な思想潮流とそれを具現化せんとする勢力の相克と交錯によって彩られてきた。本研究では、19 世紀初めごろから芽生え始め立憲革命（1905~11 年）を経て様々な形態へと分岐していったナショナリズム、及びこれまた「伝統的」なウラマーのイスラームからパン・イスラミズムや対外抵抗への契機としてのジハード主義まで種々のバージョンに現前化するイスラーム主義、それらの二大潮流の華々しい喧伝と覇権的な地位の陰で、ともすると双方の陣営からは敵視ないし等閑視され、また現在もされている社会主義潮流の源流に遡航を試みるものである。

具体的には、イランで、おそらくアジアで初めて「社会主義ソヴィエト共和国」を宣言した、いわゆる「ギーラーン共和国」に焦点を定め、その終局の様相をソヴィエト政権東方外交政策の変遷とも絡めながら考察を深めることを目的とする。その際、可能な限り３人の主要人物とそ行動背景にも留意し、そして同時代の地方分権的な諸運動とも比較検討を心がける。また、別に研究代表者が関心を抱いている、イラン知識人のあり方や彼らの西欧近代性との遭遇の現場をめぐる探究にも関連させつつ、３つの主要な思想潮流の起源と展開を分析する一助となることを目指す。

３．研究の方法

本研究計画の主たる狙いは、ジャンギャリー運動及びそれを一つの地盤として成立した、いわゆる「ギーラーン共和国」の盛衰、なかでもその最終局面に焦点を絞り、方法としては漫然と事件史を再構築するのではなく、むしろこの局面での主役であった３人の人物の思想や活動が交差し、衝突し、それぞれが各々なりの悲劇的な結末を迎える、そのダイナミズムを立体的に捉えること、そしてもう一つの方法論上の特徴として同時期の地方自律化の動きとの対比を加えることである。具体的には、既存の公刊ペルシア語史料集、収集済みの多言語的文書史料などを読み込むことに加えて、イランの未公刊文書、フランス外務省未公刊文書、ロシア社会経済史文書館未公刊文書の調査・収集を実施する。それらの史料の整理と読解のうえに立って、年度ごとに重点を、１）クーチェク・ハーンと主としてジャンギャリー勢力、２）ヘイダル・ハーンとイラン共産党グループ、３）ソ連の初代駐イラン大使、ロートシュタインとモスクワの党中央委員会及び外務人民委員部にシフトさせ、最終的には他の地方の動向との比較を試みる。また、クーチェクやヘイダルには、イラン・ナショナリズムの草の根バージョンの思想が読み取れることに鑑み、社会主義へのナショナリスト的アプローチの源流を探る意味も踏まえ、やや時間を遡りはするがイラン系知識人の近代性と国民認識の淵源への探求にも取り組む。

４．研究成果

研究期間内の全体的な到達点を振り返ってみるなら、様々な避けられない要因もあり、当初計画していた研究目標からするとやや遅れ気味となったことは否めない。なぜなら、初年度は３年間続いてきた所属部局の部局長という管理職の４年目に当たり、研究期間３年目は肉親の介護や看取りゆえ海外出張が不可能になり、そのため１年期間延長を認められたものの４年目の最終まとめの段階で新型コロナウィルス感染拡大や予防ゆえ、研究成果の発表や出張の実施を断念せざるをえない状態に追い込まれたからである。

如上の制約条件があり所期の到達点には全体として及ばなかったとはいえ、研究期間中で、論文２件、研究発表及び招待講演 11 件、図書３件（共著及び今後公刊予定１件含む）の研究成果があった。これらのうち主立ったものについて、その成果の概容や学術的意義を簡潔にまとめ、さらに今後の研究のため海外調査などを通して収集した未公刊文書や史料について説明する。

まず研究発表や招待講演では、初年度に財団法人東洋文庫現代イスラーム研究班から慫慂されて行った研究発表が挙げられる（2017 年１月）。「イラン系知識人の近代性認識と立憲革命」と題する本発表は、イラン系（いわゆるペルシア語を母語とする広域広義の意味で使用、英語では Persianate）知識人が西欧的近代性といかに出会い、自己変貌を遂げたのか、あるいはそうでないのかを問いかけ、いかにペルシア語の知識人概念たる「Dāneshmand」が、啓蒙的な含蓄をもつ「Roushanfekr」という言葉として一般化してゆくのかを問いかけた。その画期をイラン立憲革命に求め、とくに Charles Kurzman, *Democracy Denied, 1905-1915: Intellectuals and the Fate of Democracy*, Cambridge, Massachusetts and London: Harvard UP, 2008 の所論を参考に、オーギュスト・コントに代表される実証主義的な社会改造理念と知識人の使命感に関して、それらが革命を前後して変化してゆく様相をグローバルかつ通時的な視点から論じた。20 数名の専門家ばかりの研究会であったが、刺激的な討論ができた。

２つ目は、日本学術振興会・課題設定による先導的人文学社会科学研究推進事業（グローバル展開プログラム）「グローバル社会におけるデモクラシーと国民史・集合的記憶の機能に関する学際的研究」プロジェクト（代表：橋本伸也関西学院大学教授）が東北大学川内南キャンパスで開催した研究会において単独で行った、「歴史の再構成と歴史認識の変遷：イランソヴィエト社会主義共和国（「ギーラーン共和国」）の事例から」と題する研究発表である（2017 年 11 月）。これは、近年研究代表者が公表した論文「イランソヴィエト社会主義共和国（「ギーラーン共和国」）におけるコムニスト政変：その歴史の再構成と歴史認識の変遷」（岡洋樹編『歴史の再定義』東北大学東北アジア研究センター、2011）を題材に、その出版後に読解したロシア語史料や写真資料も使って考察したものである。関西はもとより関東からも同プロジェクト関係研究者が参集し、東北大学の大学院生も数名参加し、コメンテーターの見解や質疑も交えて活発な論議がなされ、とりわけ研究課題を推進する上で貴重なヒントや示唆をもらうことができた。

３つ目は、2018 年 12 月に京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター第 81 回定例講演会で行った、「イラン人旅行者が見た明治期日本」と題する招待講演である。本講演は、もちろん研究課題とは直接的関係は薄いが、アジアにおいて近代への独特な道を進んでいた明治日本を訪れた、同じ近代世界を生きるイラン人旅行者が自らの旅行記でどのように日本を表象し、そこから何を感じ取ったかを紹介した。一人はエブラーヒーム・サッハーフバーシーと名乗る商人、もう一人はガージャール朝支配エリートの一員、メヘディー・コリー・ヘダーヤト（モフベロッサルタネ）の旅行記に依拠し、関連する日本側の公文書や当時の新聞記事も使って彼らの言動を裏づけ、その発言の意味を探った。これも出席者は主に、関西在住の専門家であったが、一般公開の講演会という形態もあり若干の院生・学生などの参加もあった。とくにヘダーヤトは、クーチェク・ハーンやヘイダル・ハーンと同時代の人であり、まったく生まれも育ちも、思想も異なるが激動の 20 世紀初頭を生きたイラン人として、その後彼ら３人を対比して描くという着想を得ることができた。

その他、第 37 回（2018 年３月、同志社大学今出川キャンパス）、第 38 回イラン研究会年次大会（2019 年３月、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）で近代イラン史に関連する研究発表を行った（なお、2020 年第 39 回大会は大阪大学で開催予定であったが、新型コロナウィルス感染症拡大のため延期になった）。

次に編著書（図書）に掲載した論考２篇に関して触れておこう。１つ目の論考は、山岸智子（明治大学教授）が編集した『現代イランの社会と政治：つながる人びとと国家の挑戦』（明石書店、2018 年 11 月）に寄稿した「近代との邂逅の現場：イラン系ムスリム知識人の旅行記から」と題するものである。これは、広い意味でのイラン系ムスリム知識人がイギリスやロシアで近代性といかに遭遇し対峙したかを、３種の旅行記の記事分析を通して解明したものである。その３人とは、インド在住イラン系文人官僚の典型例としてのアブー・ターレブ・ハーン、イラン人留学生ミールザー・サーレフ・シーラーズィー、ガージャール朝王子ホスロー・ミールザーであり、前２者がイギリスに、後者がロシアに旅した際に記録された旅行記を素材にして、19 世紀前半に彼らが実地で体験した社会や政治の仕組み、そこから導き出される彼らなりの愛国心や宗教的感情を実際の叙述によって明らかにした。これも、本研究課題と直接的に関連するものではないが、広く近代性の原点でいかに西欧起源のナショナリズムや社会思想と彼らが触れ合ったかを取り上げたもので、社会主義のイランでの受容を考えるうえでその前提的議論となりうるものであろう。ちなみに、本書は、研究代表者の他に５人の著者がおり、近現代外交史の概観や現代の遊牧民社会における選挙活動の在り方に関する社会調査、現代イランの社会福祉論など多岐にわたるイランの専門的知見が盛り込まれた一書として注目されたことも付言しておきたい。中東調査会発行の専門雑誌『中東研究』（第 535 号、2019/5, pp. 89-92）で、当時同会研究員であった近藤百世が章ごとの要約紹介をはじめ、この雑誌が一般読者向けということもあり、やや専門的ではあるが信頼に値する入門書であるとの書評を載せた。また、臼杵陽（日本女子大学教授）が定評ある書評紙『週刊読書人』（2019/7/19）「中東地域研究」の欄で、「冷静にイラン社会を知る必要がる」が、そのための好個の書物として本書を推挙した。さらに、ペルシア文学研究の我が国でのパイオニア、岡田恵美子（元東京外国語大学教授、現日本イラン文化交流協会会長）は、『朝日新聞』（2020/2/22）書評欄「ひもとく」において、彼女がイランを理解するために推奨できる３冊の本の一冊として、本書のタイトルを挙げて紹介の労をとった。

２つ目の論考は、まだ公刊されてはいないが、出版元から 2020 年夏を目途に必ず出版することが確約されている、八尾師誠（元東京外国語大学教授）編『イランを知るための 50 章』（明石書店、第 26 章の予定）に掲載予定の「第一次世界大戦と地方政権の興亡」と題するものである。これは、もとより専門性の強いものでなく、一般読者を念頭に置いた概説という性格をもつ著書ではあるが、本研究課題との関連でいえば、この論考は、「ギーラーン共和国」が誕生する歴史的文脈、すなわち第一次世界大戦という未曽有の歴史変動がイランにもたらした災禍と、中央政権の弱体化、列強への従属というプロセスを簡潔だが要点を押さえてまとめたものであり、随所に最新の研究成果を活かしている（例えば、M.Gh.Majd, *Persia in World War I and Its Conquest by Great Britain,* Lanham, University Press of America, 2003 のアメリカ国務省文書に基づく研究など）し、ジャンギャリー運動から「共和国」の浮沈についても論及している。

海外調査としては、イランに２回、フランスに１回出張したが、残念ながら予定していたロシアへの調査は新型コロナウィルス感染拡大の影響で実施できなかった。イランには、2017 年９月と 2019 年７月に、各々テヘラン大学中央図書館とイラン外務省文書センターで史料調査と収集を実施した。滞在期間が短く、イラン側機関の対応が迅速でないため、計画通りには進捗しなかったとはいえ、中央図書館では日本では入手できない図書を複写し、外務省文書センターでは何点かの未公刊文書の閲覧と書写を行った。また、フランスには 1919 年２月に出張し、パリ郊外ラクールヌーヴにあるフランス外務省外交文書センター（Centre des affaires diplomatique）に４日間ほど通い、1919-1921 年の主にフランス外務省本省と在テヘラン公使館の往復外交文書を検索し、関連する文書を相当量カメラまたは電子ファイルに収めた。まだ十分に整理・活用できていないが、今後の研究に活かせるものと思われる。

その他、2016 年 10 月にイタリアのフィレンツェ大学で開催された、日本学に関する国際ワークショップで閉会挨拶（Closing Remarks）を行ったが、その記録が 2017 年に英文で刊行された。同挨拶（pp. 321-323）で、イラン系知識人アブー・ターレブ・ハーンがイタリアについて記した記述を紹介し、それを材料に自明と思われる事象が対象化されることの重要性を指摘した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 黒田　卓	４．巻 -
２．論文標題 近代との邂逅の現場―イラン系ムスリム知識人の旅行記から―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 山岸智子編『現代イランの社会と政治』	６．最初と最後の頁 138-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒田　卓	４．巻 -
２．論文標題 第一次世界大戦と地方政権の興亡	５．発行年 2020年
３．雑誌名 八尾師誠編『イランの歴史を知るための50章』（掲載確定）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 明治期日本に来訪したイラン人旅行者―商人エブラーヒーム・サッハーフバーシーを中心に―
３．学会等名 東北大学国際文化研究科中東表象研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 イラン人旅行者が見た明治期日本
３．学会等名 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター第81回定例講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 商人エブラーヒーム・サッハーフバーシーの訪日記録（1897年）をめぐって
３．学会等名 第38回イラン研究会年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 明治天皇に拝謁したイラン人訪日団（１回目）―メヘディー・ゴリー・ヘダーヤトの旅行記より―
３．学会等名 東北大学国際文化研究科中東表象研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 イラン系ムスリム知識人の見た近代世界―ヨーロッパと日本―
３．学会等名 第１回東北大学イスラム圏研究会「イスラーム学際研究の試み」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 歴史の再構成と歴史認識の変遷―イランソヴィエト社会主義共和国（「ギーラーン共和国」）の事例から―
３．学会等名 JSPS先導的人文学社会科学研究推進事業（グローバル展開プログラム）「グローバル社会におけるデモクラシーと国民史・集合的記憶の機能に関する学際的研究」プロジェクト（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 イラン系ムスリム知識人がみた近代世界
３．学会等名 第37回イラン研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 イラン系知識人の近代性認識と立憲革命
３．学会等名 東洋文庫現代イスラーム研究班第４回構造変動セミナー（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 王子ホスロー・ミールザー訪露謝罪使節団顛末序説
３．学会等名 東北大学国際文化研究科中東表象研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 王子ホスロー・ミールザー訪露謝罪使節団顛末序説（第二部）
３．学会等名 東北大学国際文化研究科中東表象研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 黒田　卓
２．発表標題 現代イランの素顔/別天地/カーブースの塔
３．学会等名 東北大学国際文化研究科中東表象研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 黒田　卓　山岸智子他４名	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 224
３．書名 現代イランの社会と政治	

１．著者名 Ch. Craig, E. Fingaro, A. Ozaki　(eds.)	４．発行年 2017年
２．出版社 Mimesis International	５．総ページ数 323頁
３．書名 How to Learn? Nippon/Japan as Object, Nippon/Japan as Method	

１．著者名 黒田　卓　八尾師誠他	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 -
３．書名 イランの歴史を知るための50章（発行確定）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考